

北部九州における窯業の現状とそれに基づく景観の意義：小石原と波佐見の比較

九州産業大学工学部 学生員 ○濱田英里・豊岡広平
九州産業大学景観研究センター 内山忠・丸谷耕太・山下三平

1. はじめに

1-1 背景

2005 年 4 月 1 日に文化財保護法の改訂が行われ、文化財に重要文化的景観が含まれることとなった。2013 年 10 月 17 日時点で、全国で 38 件が重要文化的景観に選定されている。産業別にみると第一次産業で農耕に関する景観が 26 件、水利用に関する景観が 20 件と、数多く選定されている。これに対し、第二次産業に関連するものは佐渡西三川の砂金山由来の農山村景観（新潟県佐渡市）、宇治の文化的景観（京都府宇治市）、新上五島町崎浦の五島石集落景観（長崎県南松浦郡新上五島町）、別府の湯けむり・温泉地景観（大分県別府市）、小鹿田焼の里（大分県日田市）の 5 件と比較的少ない¹⁾。さらに窯業に注目すると、小鹿田焼の里（大分県日田市）の 1 件だけである。

窯業文化は北部九州に根付いており、伝統を守りつつ、人々の時代や暮らしに合わせて変化してきた。伝統と歴史のある窯業の文化的景観の価値を正しく評価し、地域ならではの個性を見出して²⁾、次世代へと継承していくことが重要である³⁾。

1-2 目的

本研究では北部九州の窯業の産地として代表的な、長崎県の波佐見町と、福岡県の東峰村を取り上げる。両地域を比較し、自然の活用や窯業の現状を把握することで、その文化的景観の保全に役立つ視点・力点について考察することを目的とする。

2. 対象地域

調査対象地域は、上述のとおり長崎県波佐見町の中尾郷と福岡県東峰村の小石原地区である。両里とも旧通産省（現経産省）から伝統工芸品の指定を受けている。1975 年に小石原焼が陶磁器初の伝統工芸品に指定され、1978 年に波佐見焼が指定された。また文化財の指定も受けており、1985 年に小石原は修験道深仙宿資料が福岡県指定有形文化財に指定され、波佐見は肥前波佐見陶磁器窯跡が国指定文化財に指定された。このように波佐見と小石原には焼物が伝統工芸品

であることと、指定文化財を持っていることで共通している。

調査対象地域の波佐見町と東峰村の人口と男女別の構成、戸数、地域の総面積、焼物の種類と特徴をまとめたものを表 1 に示す。総面積は同程度であるが、波佐見の方が人口が大きい。また、波佐見は磁器、小石原は陶器を作る里である点に違いがある。

表 1 波佐見町・東峰村の概要⁴⁾⁵⁾

	人口(2013.11末)	男性	女性	戸数	総面積	種類	特徴
波佐見	15,244人	7,210人	8,034人	5,091戸	55.97km ²	磁器	青磁と絵付け
小石原	2,413人	1,099人	1,314人	914戸	51.93km ²	陶器	飛び髷 等

3. 調査・分析方法

3-1 調査方法

本研究では、波佐見焼の窯元の歴史や現状、資源利用、作業工程と近代化の変遷等の基礎的情報を得るために、アンケート調査を行った。また比較のために、小石原で行ったアンケート調査の結果を扱う⁶⁾。対象地域、期間、平均年齢、および回収率を表 2 に示す。回答者の平均年齢を見てみると、年代は両里とも 50 代であり、若干ではあるが波佐見の方が平均年齢が低い。回収率は小石原で 93.2%、波佐見は 75%であり、小石原の本調査に関する関心の高さが伺われる。

表 2 小石原焼・波佐見焼調査概要

	小石原	波佐見
調査方法	アンケート調査	アンケート調査
配布方法	個別配布	波佐見陶磁器工業組合にて設置、配布
回収方法	郵便回収	波佐見陶磁器工業組合にて回収
調査日時	2012年11月1日～11月18日 (1日配布、8日、17-18日回収)	2013年10月26日～11月15日 (10月26日組合に設置、11月15日回収)
調査対象	小石原焼陶磁器工業組合加盟の窯元全44件	長崎県東彼杵郡中尾郷の窯元全20件
平均年齢	53.9歳	52.2歳
回収率	41/44軒(93.2%)	15/20軒(75%)

3-2 調査票の内容

表3のとおり、調査票は波佐見ではA～Fの6項目、小石原ではA～Eの5項目で構成されている。作陶の原材料と工程に加え、街づくりに関する質問項目が含まれる。

表 3 小石原焼・波佐見焼調査票の質問項目

波佐見焼	小石原焼	詳細
項目	項目	
A: 原材料	A: 原材料	陶土・釉薬の調達及びそれらに対する意識、山との関係
B: 窯と燃料	B: 窯と薪	使用する窯と燃料となる薪の調達、及び窯に対する意識
C: 水利用	C: 水の利用	使用する窯と燃料となる薪の調達、及び窯に対する意識
D: 成形と絵付け	—	成形と絵付けの調達
E: 焼き物と町	D: 小石原焼と町	街並みの変化への意識、イベントに対する意識、小石原焼の問題点等
F: 窯元の現状	E: 窯元の状況	開窯年、生産販売状況、存在歴と技法の習得、まちづくり活動への参加の有無

4. 結果

4-1 資源利用

近代化に伴って、両里とも燃料が薪から石炭、石油、電気およびガスへと変化した。一方、材料である土は、小石原では必ず地元のものを使うのに対し⁶⁾、波佐見は地域外の天草磁石を取り入れる点に違いがある。その意味で、小石原のほうが地域の自然依存度が高い。

4-2 窯窯の時期と数の変遷

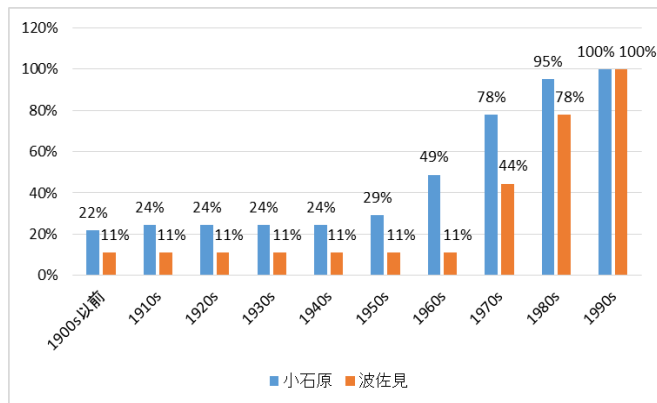


図1 窯窯の開窯数の変遷

図1は小石原と波佐見の窯窯の開窯数の変化を示したものである。小石原・波佐見の双方とも、1970年代以降に窯窯数の増加が見られる。ただし小石原では50年代から増加が始まり比較的早い。民芸運動によって支持された小石原が他の地域に先だってブームに乗りだした、先駆的地域であることが確認される。

4-3 年間生産額

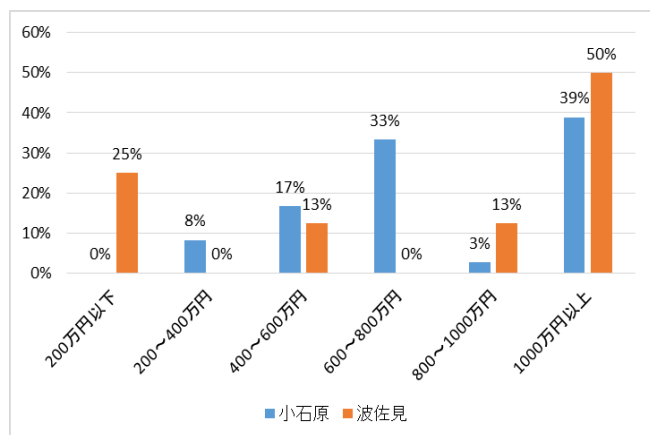


図2 年間生産額

図2は小石原と波佐見の各窯窯の年間生産額を示したものである。波佐見は1000万円以上の窯窯が一番多く(50%)、その次が200万円以下である(25%)。一方、小石原にはそれほどの隔差が見られない。小石原に比べて波佐見では、このように生産額の隔差が大きく、地域協働で里の活性化・文化的景観の活用を図るには、小石原のほうがやや有利と推察される。

4-5 窯元直売売上

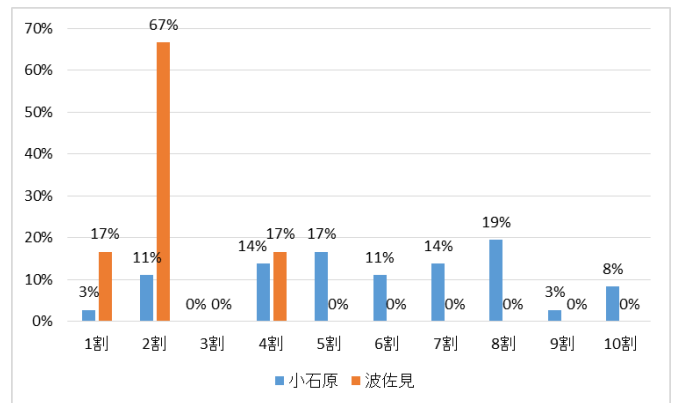


図3 窯元直売売上

図3は小石原と波佐見の窯元での直売の収益の割合を表したものである。波佐見は窯元直売での売上が2割以下というものが84%に上る一方、小石原では窯元直売での売上が5割以上の窯元の割合が72%を占める。これは波佐見に比べ小石原は訪れて焼物を購入する人が多いことを示す。小石原においては、他地域の人を魅了する文化的景観の重要さが、波佐見より大きいと考えられる。とはいえ波佐見においても直売が一定の割合を示していることから、訪問者を多く集めるニーズはあると示唆される。

5. まとめ

本研究は波佐見と小石原との作陶に関する比較を行った。また文化的景観の活用に関して考察した。その結果をまとめると以下のとおりである。

- 1) 民芸運動によって支持された小石原は、他の地域に先だって陶芸ブームに乗った先駆的地域である。
- 2) 地域協働で里の活性化・文化的景観の活用を図るには、波佐見より小石原のほうが有利である。
- 3) 小石原は他地域の人々を魅了する、文化的景観の重要さが、波佐見より大きい。

上述の二つの里に加え伊万里鍋島焼の里である大川内山と、平戸焼を源流とする三川内焼の里の調査も行っている。今後はこれらとの比較を行う予定である。

<参考文献>

- 1)文化庁:文化財:文化財の紹介:文化的景観:
<http://www.bunka.go.jp/bunkazai/shoukai/keikan.html>,2013.
- 2)波佐見陶磁器工業協同組合: <http://www.hasamiyaki.or.jp/>,2013.
- 3)田中慎太郎: 長崎県の陶芸の里に着目した文化的景観の空間構成に関する基礎的研究:波佐見と三川内の事例,九州産業大学工学部都市基盤デザイン工学科卒業論文,2013.2.
- 4)東峰村: <http://www1.vill.toho.fukuoka.jp/index.asp>,2013.
- 5)長崎県波佐見町: <http://www.town.hasami.lg.jp/index.html>,2013.
- 6)K.Maruya, S.Yamashita, T.Uchiyama and Y.Ogawa: Potter' Recognition of Areas Appertaining to Pottery Production in the Village of Koishiwara, The 9th International Symposium on City Planning and Environmental Management in Asian Countries , pp.8, 2014(in press).